

原著論文

統語体のインターフェイス同一性に基づくコピーの
書き出しについて—関係節中の再録代名詞を中心に

高橋 洋平*

要旨：本稿では近年のミニマリスト統語論研究における統語体 (SO) のコピーの書き出しについて取り上げている。Chomsky (2019, 2020) などで講じられた統語体のインターフェイス上の同一性に基づくコピー形成という新たな方向性に着目し、内的併合配列をなすSOがCI/SM両インターフェイスから見て十全に同一的であるという新たな基準を仮定することによって、その基準を満たさない場合は配列内のSOが削除されずSMで顕在的な形で書き出されるという予測がもたらされる。そこで本稿では、この予測を検証するために関係節内の再録代名詞化に着目する。従来、再録代名詞を含む関係節内の先行詞と関係詞、そして再録代名詞のSO同一性の担保には束縛や指標付与といった非極小的なデバイスの仮定が必須であることが問題だった。しかし、先の基準を仮定したインターフェイス同一性のシステムを採用することによって、そのようなデバイスに頼らずとも、件のSO間のCI同一性とSM非同一次性が導出される。

キーワード：ミニマリストプログラム, インターフェイス, コピー, 再録代名詞, 十全同一性

On Copy Realization under Interfacial Identities of Syntactic Objects:
A Study from Resumptive Pronouns in Relative Clauses

Yohei TAKAHASHI*

Abstract: This paper addresses copy realization of syntactic object (SO), which has been a central issue of recent minimalist syntax. Focusing on Chomsky's (2019, 2020 among others) new approach to copy formation under interfacial identity of SO, I hypothesize a criterion for licensing IM configuration, which is referred to as *fully identical/full identity*. This predicts that if the criterion is not satisfied among SOs in single IM configuration, it results in an SM output where irregular copy realization takes place. In order to testify this proposal, I examine resumptive pronouns (RPs) in relative clauses that have compelled us to adopt binding and referential indexing, for co-referencing an antecedent, relativizer and RP. However, a proposed approach with the hypothesized criterion becomes a better alternative for accommodating CI/SM asymmetries among those SOs without relying on the above old-fashioned devices.

Keywords: Minimalist Program, Interface, Copy, Resumptive Pronoun, the Concept of Fully Identical/Full Identity

*東京情報大学 総合情報学部
Faculty of Informatics, Tokyo University of Information Sciences

2021年10月15日受付
2021年12月24日受理

I. はじめに

遍在的な言語現象の一つに転移 (displacement) がある。以下(1a)の英文における what はその文が疑問文であることを示す談話的な機能を示す一方で、(1b)が示すように eat の目的語としての機能も果たしている。

(1) a. What did you eat yesterday?

b. what_i did you eat what_i yesterday?

このように転移とは単一の統語体 (syntactic object: SO) が構造上の複数の位置で何らかの寄与を行う現象を指す。そしてこの現象は生成統語論の領域において様々な変遷を経ながら、SOが一旦基底生成された位置から別の位置へと移動 (movement) し、そして移動はSOのコピー (copy) を伴うと想定することにより説明されてきた。これがいわゆる移動のコピー理論 (copy theory of movement) である。その結果、(1b)における_iという指示指標 (referential index) が施された二つの what はコピーであるため同一指示的であることが自然な形で説明された。なお、最近の傾向として、移動についても構造構築操作である併合 (Merge) に還元されることから内的併合 (Internal Merge: IM) という名称が移動と同義でよく用いられる。なお、IMと対称的な併合として、レキシコンから選択したSOと派生内のSOの併合については外的併合 (External Merge: EM) と呼ばれる。

ところが、Chomsky (2019, 2020 among others) の一連の論考以降、SO間の同一性の保証とコピー形成に関する議論は新たな展開を迎えた。そこでは、同一性の保証が概念意図 (Conceptual-Intentional: CI) インターフェイスが統語論に直接アクセスすることで複数のSO間の同一指示性が保証されると提案されたのである。つまり、コピー移動によってSO間の同一性が担保されていた事例についても、実際の移動の有無に関わらずCIインターフェイスによってそれらが同一指示的な関係にあることが保証される可能性が提唱されたわけである。このCIインターフェイスによる同一性の検知を司るために文法機能内に想定された理論装置は解釈機構INTと呼ばれる。INTは極小探査 (Minimal Search: MS) によってC統御領域内にあるSOを探査する。INTにより同一指示的な関係とみなされた非連続的なSOは内

的併合配列 (IM Configuration: IMC) の条件を満たす。そして、IMCをなす非連続的なSOに対しコピー形成 (Form Copy) が適用されることにより、そのSOはコピーと認定されるようになったのである。この一連のシステムは長年の懸念であった制御構文 (control) に対してより優れた説明が提供可能になるとChomskyは主張する。例えば、(2a)の例は主節の主語であるJohnが同時に不定詞節の主語でもあることを説明するためには、(2b)で示すように制御子 (= John) との同一指示性が想定されたPROという言語獲得上の出自がはっきりしない形式的な語彙を使わざるを得なかった。しかし、(2c)で示すように二つのJohnの同一性がINTに基づくコピー形成によって保証され、かつコピーの外在化 (Externalization) については通常上位のコピーが発音されるように感覚運動 (sensorimotor: SM) インターフェイスに指令が送られると想定してしまえば、PROを仮定する必要性を放逐することができる。

(2) a. John tried to leave the country.

b. John_i tried PRO_i to leave the country.

c. John tried John to leave the country.

以下(3)は林 (2020) からの引用であり、従来指示指標を用いて同一性を保証していた現象をまとめたものである。

(3) a. コピーによる解釈 (IM)

b. CIインターフェイスが与える同一性 (identity) の下での解釈 (関係代名詞や再録代名詞など)

c. 語彙的／代名詞的な指示関係

(林 (2020: 1), 筆者により一部割愛)

本稿が目指すのは、コピー形成の理論に関するパラダイムシフトが起きている現在において、上述の指針から示唆される拡張可能性について検証し、コピー形成に関する言語機能内の基礎仮説の中身を明らかにすることである。それにより、SO間の同一性の保証という生成文法研究の歴史の中で長く論じられてきた問題の解決の寄与を目指す。本稿で取り上げる言語現象は関係節構文に観察される再録代名詞 (resumptive pronoun) である。ただし、再録代名詞についてはその定義をめぐり先行研究で意見が分かっているため、まずII節において主にRadford (2019) とBoeckx (2003) の先行研究を参照しながらその特性について紹介する。その後、III節においてI節で概観したコピー形成のシステムに立脚した関係節

内の再録代名詞化の派生案について検証を行う。IV節は本稿のまとめである。

II. 再録代名詞について

再録代名詞（以下RP）とは、広義において、演算子によって束縛される変項位置に生起する顕在的な代名詞のことを指す。例えば(4)が示すように、RPは関係節やwh疑問文のようなA'移動構文の内部に観察されるのが一般的である。以下、RPを下線で示す。

(4) a. There was one guy who I didn't think that he would come.

(Radford (2019: 54), 下線含め筆者により一部修正)[注1]

b. Who does Jane think that Mary meets the people that will fire him?

(Ibid: 57)

RPに関する先行研究はこれまで数多く存在し、その出現環境、派生方法、RPを用いた文例の容認度判断、RPの定義に至るまで議論されてきた。しかし、それぞれの議論が支持する結論に対して、同程度の反証が交互に提示されるような状況が続いており、未だにその実態については定説が得られていない状況である。この点については網羅的研究であるRadford (2019)が詳しい。例えば、RPの出現環境はA'移動/摘出が阻まれる環境に限られるという主張 (Erteshik-Shir (1973), Borer (1984), Hornstein (2001) など) がなされる一方で、(4a)に示されるように島環境とは無関係にRPが生起する事例も多く散見される。また一方では(4a)のような事例に関して、RPの認可は摘出可能性とは本質的に無関係であり、関係詞 (relativizer) とその関係節内の空所位置間の距離が長ければ長いほどRPが認可されやすいという指摘 (Erteshik-Shir (1992) など) も存在する。しかし、Radfordが提示した(5a, b)のような事例を考慮すると、これも決定的な一般化とはならない印象を与える。以下、イタリック体は関係詞、下線はRPを指す。

(5) a. There was a lack of confidence in the organizing committee, *which* it's still there underneath the surface [. (YT)]

(Radford (2019: 80))[注2]

b. He's a player *who*, you know, he was captain of the youth side [. (YT)] (Ibid)

(5a, b) からも示唆されるが、Radford (2019) は採取した膨大な事例の観察を通じて、RPが生起する関係節構文はいわゆる非制限的關係節 (appositive relative clause: (5a)) やPrince (1990, 1995) が提唱した種類關係節 (kind-relatives: (5b)) に集中するという一般化を提示している。これは形式的な統語分析について様々な示唆をもたらす。例えば非制限的關係節であればその関係節内の空所は先行詞と同一指示的な束縛代名詞 (bound pronoun) が生起すると考えられるため、制限的關係節内部に想定されるような文脈上の指示対象によって束縛される変項 (variable) の類ではないことから、RP文と非RP文では意味解釈上相違が存在することが示唆される。この点については、Chomsky (1977) におけるRPと束縛子の中で形成されるA'関係は空所を伴うA'移動によって形成される演算子変項構造とは本質的に異なるという観察と合致するだろう。また、Chao and Sells (1983) では、RPを含む文はEタイプ代名詞 (E-type pronoun: Evans (1980)) 的な解釈を持つことが指摘されている[注3]。

一方、ここまで概観してきたRPの見解とは異なる立場を説得的に展開している論考にBoeckx (2003) が挙げられる。Boeckxは極小主義的な言語機能による文生成システムにおけるRPの役割と出自という視点から詳細な議論を展開している。紙幅の都合上、本稿での議論と直接的に関わってこない詳細については割愛しながら説明すると、移動によって形成された連鎖 (chain) はSMインターフェイスにおいて適切に出力されるような情報を持っていない。これはChomsky (1995) 以来の完全解釈の原理 (Principle of Full Interpretation) の一部として広く認識されている。BoeckxはSMインターフェイスで読み取られる要素を強生起 (Strong Occurrence: S-OCC) と呼称する。以下(6a)で示すように、連鎖には必ず通常一箇所のS-OCCが含まれるという一般化を明瞭連鎖原理 (Principle of Unambiguous Chain: PUC) として定式化している。

(6) a. $\{\alpha^* \dots \beta\}$ (* = 強素性を充足するコピー)

↑
b. $\{\alpha^* \dots \{_{DP} \beta^* \alpha\}\}$
↑

したがって、連鎖内の一つの成員だけを顕在的なSOとして出力すればそれでいいはずだが、観察さ

れる広範な事実は必ずしもその予測を裏付けるわけでない。そこでBoeckxは、移動によって生起する複数のコピー（ここでは α 、 β と仮定）を単一の複合的要素 ε と見なす場合があると提案している。この場合、 α は α 、 β は β でそれぞれの位置で強素性を充足し、そしてRPこそが複合的要素 ε の中の β として強素性を充足するために用いられる手段だと主張する。これは(6b)で図示されている。その際、 α と β は元々単一のDP構造を形成しており、 α が移動し、その結果 β (= RP) はDP内に残留 (stranding) すると想定している[注4]。したがって、Boeckxからすれば、RPとは言語がPUCというインターフェイス条件を充足するための手段の一つに過ぎず、先に指摘した摘出が伴う容認可能性低下の改善のために用いられることは本来のRPの役割ではないとしている。また、(4b)のような島の制約の違反を度々示す英語についてはこの基準に符合する純粋なRPを持たないため、いわゆる侵入的な代名詞 (intrusive pronoun) を採用していることに過ぎないとしている。事実、BoeckxはRPによる容認可能性の改善効果に懐疑的な姿勢であり、RPを用いようが用いまいが該当する事例は完全に容認できるものではないという立場を取っている[注5]。なお、本稿の目的はRPの定義について明確にすることではないことをここで断っておく。あくまでも本稿の目的は、RPと称される事例を概観した上で、I節で提起したコピー理論の可能性と関連づけることによりどのような帰結がもたらされるか明らかにすることである。

次に、RP文に現れる関係詞 (relativizer) について取り上げる。以下(7)が示すように、口語英語から広範にRPの使用例を採取したRadford (2019) は全444例を観察した結果、用いられる関係詞の大半がwhich, that, whoである一方で、ゼロ関係詞 \emptyset やwhere, whereby, whatといった関係詞が使われる例についても一定数存在することを指摘している。

whichやwhoが用いられるということは先行詞の有生性 (animacy) に一致する形で関係詞が選ばれ

ていることを意味するが、whereやwherebyが用いられるということは、以下(8-9)のように、その一致が観察されないようなケースも観察されるということである[注6]。イタリック体は関係詞、下線はRPを指す。

- (8) a. He has players *where* he just ignores them.
 b. I've never known a game *where* you just don't know which way it's gonna turn till the end of the match.

(Radford (2019: 84), 筆者による一部修正)

- (9) a. I think there are a lot of managers *whereby* you're not a hundred percent sure whether they're going to be there next year.
 b. I would rather choose to be with someone *whereby* they compliment my life ...

(Ibid: 86), 筆者による一部修正)

これらの事例は種類関係節構文に相当すると判断できる。Radfordは、(8)におけるwhereは本来の斜格自由関係代名詞としての用法に加え、現代口語英語では“of such a kind (that)”という解釈を伴う用法を持つようになったと指摘している。加えて、観察される事例に以下(10)のような事例が存在しないことから、この関係詞whereは補文標識C主要部を占めるとRadfordは想定する[注7]。

- (10) a. * He has players *where* that he just ignores them.
 b. * I've never known a game *where* that you just don't know which way it's gonna turn till the end of the match.

一方Boeckxは、様々な言語のRPの観察を通して、先行詞 - 関係詞 - RP間の一致をRPの認可条件と捉えている。以下(11a)はゲール語、(11b)はギリシャ語の事例である。RPに相当する要素はそれぞれ下線を施してある。

- (11) a. ? *Siud am boireanach nach eil fhios* *agam*
 that the woman not be knowledge at-me
ciamar a phòsadh duine sam bith i.
 how C marry-COND anyone her

(7) RPを伴う関係節の関係詞の種類と割合

項目	<i>which</i>	<i>that</i>	<i>who</i>	<i>zero (\emptyset)</i>	<i>where</i>	<i>whereby</i>	<i>what</i>
数	135	138	95	38	27	9	2
割合 (%)	30.4	31.1	21.4	8.6	6.1	2.0	0.5

(Radford (2019: 83), 筆者により表記上の修正)

‘That’s the woman who I don’t know how anyone could marry her.’

(Boeckx (2003: 110), 下線は筆者による)

- b. * *Pira mia efimerida pu o Petros apokimithike*
got.I a paper C the Petros fell-asleep
eno tin diavaze.
while it read.he
‘I got a paper that Petros fell asleep while reading (it)’

(*Ibid.*: 111), 下線は筆者による)

(11a)ではRPが弱い島 (weak island) の一種であるwh島 (wh-island) の内側にある一方で, (11b)ではRPが強い島 (strong island) の一種である付加部島 (adjunct-island) に内側にある。Boeckxは前者の容認度判断を「?」とし, 後者に関しては「*」と判断しているが, Boeckxのアプローチに従えば, 一致とそれに連動するIMの適用の可否にその原因が自然と求められることになるだろう。摘出可能性に干渉する島の効果については, 統一的な説明が望まれないながらも, それぞれ島が示す効果の強弱に起因する不安定な容認可能性が報告された言語データが余りにも広範であるため, 強固な一般化を導くことは困難である。この状況を鑑みて, Boeckxは島の効果の取り扱いについては柔軟な立場を取っており, 複数のアプローチを仮定することもやむを得ないという見解を示している。そして, (11a)の弱い島については, 埋め込み節のCP指定部位置に演算子が生起し, これがC主要部とRPを内包するDP間の一致に干渉効果 (intervention effect) をもたらしため, やや容認可能性が低下するとしている。一方, (11b)の強い島の例については, 真の付加部島については外側からその内部について探索することが不可能であるため, 演算子の移動が生じないと想定している[注8]。

一方, 先に言及したように, Boeckxは英語に観察されるRPは純粋なRPではなく, 嵌入的な代名詞としている。実際にRadford (2019) が提示したデータの中には, 以下のように弱い島だけでなく強い島の内部にもRPが生起するものも含まれている。

- (12) a. I really liked flying in an airplane *that* I understand how it works.

(Radford (2019: 54)) [注9]

- b. King Kong is a movie *which* you’ll laugh yourself

sick if you see it. (*Ibid.*: 54) [注10]

- c. The name that sticks out for me is Lee Clark, the former Huddersfield Town manager, *who* the eyebrows were raised when he lost that job in the first place. (*Ibid.*: 70)

(12b)についてだが, これは解釈的にも種類関係節の事例と判断可能であろう。また, 関係詞にはwhichが使用されているが, これらの事実はある可能性を示唆しているように思われる。種類関係節によく見られるように, この文の主節の述部は繫辞isと述部名詞a movieから成り立っている。固有名詞主語のKing Kongは繫辞isを介し, 述部名詞である先行詞a movieの外延 (extension) に含まれた包含 (entailment) 関係にある。すると, 下線部のitが指す内容は述部である先行詞a movieでありながらも, その外延に含まれかつ実項 (argument) であるKing Kongと見なす可能性についても考えられる。また, この文例では関係詞にwhichが使われている以上, カンマこそ見られないがそれが非制限的關係節である可能性も否定できない。de Vries (2006) などで講じられているように, 非制限的關係化では関係節の内部において先行詞に相当する完全なDPではなく音形を持たない同一指示的な束縛代名詞の繰り上げが関与していると仮定しよう。すると, (12b)がa movie / King Kongを指し示す束縛代名詞が元位置において顕在的なRPとして書き出しを受けた非制限的關係節である可能性が生まれ, Radfordが提示した傾向により合致することになる[注11]。一方, (12c)については先行詞がLee Clarkであり, かつ表層形からそれが非制限的關係節であることが自明であるため, これについては一般的な嵌入的な代名詞が生起する典型例と言えよう。すると, 問題は(12a)である。これを考えるに際して, Boeckx (2003) の関係節内の主語位置に生じるRPの事例に関する議論を参照したい。以下(13a-b)はアイルランド語 (Irish) の例である。共に関係節内の主語位置にRPが生起する例だが, 容認可能性にコントラストが観察される。

- (13) a. *An fear a raibh sé breoite.

the man aN was he ill

‘The man that was ill’ (Boeckx (2003: 83))

- b. An fear ar dhúirt mé go dtiocfadh sé.

the man C said I C would-come he

‘The man that I said he would come.’

(Boeckx (2003: 84)) [注12]

この容認可能性の対比について Boeckx は, Pesetsky and Torrego (2001) の不変化補文標識 *that* に相当する語は T に接辞化 (cliticization) するという説を援用しながら, 以下のような説明を与えている。a ‘*that*’ が接辞化した T は自身の探査領域内で最も近い目標子を探す。それが (13a) の場合は元々 vP 指定部に生起していた *an fear ‘the man’* に相当する。一致の後, T の持つ [EPP] の充足のため内的併合が駆動されるが, これはある問題を生む。というのも, T との一致に伴い *an fear* が不活性となった結果, C が一致する標的が自身の探査領域内から失われてしまい, その結果, (13a) が排除されると考えられる。一方, (13b) についてだが, *dhúirt mé ‘I said’* が挿入されているため, T は最も近い目標子として *mé* を選択し, EPP の充足のため内的併合を駆動する。しかし, この場合は C から探索可能な *an fear* が活性のまま残っているため一致が可能である。その結果, DP 内の D が RP として残留しながらも, 演算子 NP が指定部へと内的併合を遂げることになり, (13b) が派生される。この一致のメカニズムが (12a) にも同様に作用するとすれば, 容認可能性は自然と導出されるように思われる [注13]。

本節の議論を総括するために, ここまで取り上げた RP の事例について, 関係詞の種類, 島の効果の影響, 構文的特徴の項目に基づき分類すると以下 (14) のような結果が得られる。なお, Boeckx は論考の中で “genuine resumptive pronoun” という呼称を用いて, (a) 型と (b) 型を区分していたが, 本稿では何をもって “genuine” か否かを判断する基準を設けていない上, それを決めることは本稿の本来の目的から大きく逸脱してしまうため, あえてその表現を用いることをここではせず Boeckx 型という名称を便宜的に与えている。本節の目的はあくまでも次節以降の議論における準備として, RP と呼称される事例の概観に過ぎない。次節では, 基礎仮説の

検証という大きな目的の下, 各事例の派生案について検討する。

Ⅲ. 考 察

本節では, 前節で概観した RP 構文の議論を基に該当事例の統語派生について考察する。その際 Chomsky (2019, 2020 among others) 以降の枠組みを基礎としながら, コピー形成とその書き出しに関して十全同一性という基準を設けることにより, 異形態のコピー書き出しに関する提案を行う。また本節の後半では前節で嵌入型 RP と認定した事例の派生案について取り上げる。その関係節の非制限的な性質に注目した上で, 嵌入型 RP の関係節は主節と等位接続関係にあり, Chomsky が提唱したシーケンス形成の標的となることを提案する。

I 節で概観したように, 上掲の Chomsky の先行研究以降新たに想定された言語機能内の基礎機構として INT, IMC, コピー形成が挙げられる。繰り返しになるが, INT は作業空間内の派生にアクセスすることにより IM 関係にある SO を検知する機構である。派生はマルコフ過程的 (strict Markovian) であるため, INT は派生における IM 適用の記録を参照することができず, インターフェイスから見た SO の同一性に基づいて IM 関係の認定を行う必要がある。そして, INT によって同一指示的と認定された SO の連鎖は IMC とみなされる。IMC と認定された SO はコピー形成の適用によってコピーと認定される。なお, これらのシステムがもたらす重要な帰結は, 派生が厳密なマルコフ過程的であることと INT を起点とするコピー形成のプロセスの導入の結果, IM だけでなく EM によって派生に併合された SO に関しても, 上述のシステムに適合さえすればコピーと判断されるという点である。この可能性については, 従来の IM によるコピー形成と区別する目的で IM 空所 (IM Gap) という名称が与えられている。

一方, II 節では先行研究を参照しながら関係節中

(14)

タイプ名	関係詞の種類	島の効果	構文的特徴
(a) Boeckx 型	不変化の補文標識	影響する	一般的な制限的關係節
(b) 嵌入型	wh 代名詞および不変化の補文標識	影響しない場合がある	種類關係節, 非制限的關係節

に生起するRPの特性について概観した。便宜的な目的の元、(14)にてRP構文をBoeckx型と嵌入型に分類した。RPが含まれている制限的／非制限的關係節の環境下の相違は統語的にも意味的にも大きな相違をもたらすことが予測されるが、少なくとも両方の型について共通して言えるのは以下(15)である。(15) RPを内包する關係節構文では、先行詞・關係詞・RPの間に指示的同一性が保持される。

Boeckx型のRPは制限的關係節中に生起するため通常の束縛変項としての性質を帯びる一方で、Radford (2019) から多く採取された嵌入型のRPについては非制限的關係節であるため束縛代名詞としての性質に近いことがそれぞれ推測される。ここで(15)に関して、統率・束縛理論当時の代表的な研究であるSafir (1986) に言及したい。SafirはRPの認可条件として(i)關係節内部で關係詞(演算子)によって局所的にA'束縛され、かつ(ii)先行詞によってR束縛される必要があることを指摘している[注14]。しかし、この際問題となるのは、RPと關係詞間の同一性については統語論におけるA'移動の適用により保証されるものの、先行詞と關係詞・RP間の同一性の保証はそのままでは上手くいかない。そこでSafirは、先行詞と關係詞は当時仮定されていたLF部門において同一指標(coindexing)という操作が適用されることによって同一性が保証されると講じた[注15]。そして、關係詞と先行詞の同一性が保証された結果、RPについても先行詞と同一であることが間接的に保証されることになり、結果的に(15)が充足されることになると主張した。しかし、Safirの分析は提案の背景になる理論枠組みが現行の枠組みで放棄されてしまったものに大きく立脚しているという宿命的な問題を抱えている。それは、注15でも言及した統語論の外側のLF部門における解釈規則の仮定に他ならないのだが、当然、問題の事実を説明するために解釈規則の存在を再提唱するのは到底コストに見合わない行為である。しかし一方で、節境界を越境する先行詞・關係詞・RPという三つのSOの同一性を間接的な形で説明するという洞察は非常に有用であるように思われる。現行の枠組みを形成する基礎仮説群からその効果を再現することにより、件の問題の解決だけでなくコピー形成と外在化を司る機構の解明に寄与をもたらすことが期待される。以下、この可能性について検討していく。

先に述べたように、EMによって派生に併合されたSO間でもコピー形成が適用されるオプションがあるとすると、先行詞、關係詞、RPの連鎖關係についてもIMの適用に同一性の認可を依拠することなく、このオプションを行使することで(15)を説明する可能性が開ける[注16]。そこで、この可能性を以下(16)として定式化する。

- (16) a. SO間のCI同一性とSM同一性が完全に合致している状態を十全な同一性(full identity)が保証された状態と想定する。
 b. 十全な同一性が担保されたSO間では最上位のコピーだけが[undeletable]というSM指令を受けるため他のコピーについては削除されるが、非十全な同一性にに基づき形成されたコピーについては下位のコピーについても[undeletable]のSM指令を受ける場合がある。
 c. $WS = \{ \alpha \dots X_i \dots \{ \beta \dots Y_j \dots \{ \gamma \dots Z_k \dots \} \} \} \rightarrow$
 SM output: $\dots X \dots \dots Y / \Upsilon \dots \dots Z / \Xi \dots$
 (i) where $X = Y = Z$ in terms of CI identities;
 (ii) X, Y, Z refer to an SO with distinct morphophonetic codings;
 (iii) subscripts "i" are only used for expository purposes.

この提案はI節でも概観した制御構文に対する新たなアプローチに着想を得たものである。特に、以下(17)に記す部分制御(partial control)の現象に対するChomsky (2020)の説明に大きく負っている。Chomskyによると、(17b)における下線部の形態音韻形が異なる同一指示の要素Johnとfor usはINTによりIMCとみなされコピー關係を形成し、PF出力の際にはIM空所に相当するfor usが削除される。結果、(17a)として書き出しを受けることになる。

- (17) a. John arranged to meet at noon.
 b. John arranged for us to meet at noon.
 (Chomsky (2020: (19-20)))

ここで注目すべき点は、実際のIMの適用に関わらずINTが検知するCI側の同一性のみに基づいてコピー關係をSO間に割り当てているという点である。もしこの手法が成立するのであれば、INTが参照する「同一性」には尺度が存在することを示唆される。その可能性を本稿では(16)として仮定する。これには、コピーの同定を十全な同一性という基準

に照らし合わせることによって、より広範な言語事実を捉える可能性を追求するという意図がある。そして、(16a)はその最も単純な帰結として(16b)という可能性を予測する。すると、 Φ 特性の一致に加え同一指示的な関係にありながらも、SM的には非同一的な関係にある先行詞 (= X)・関係詞 (= Y)・RP (= Z) という非連続的なSOを標的としたコピー形成がこの提案の射程に入ってくる。以下、この可能性について検証するが、その際二つの問題が浮上する。

一つは、Safirが言及しているように、一致の成員X-Y-Z間の距離が局所的でない点である。特に(嵌入型の多くの)RPはII節で見たように島環境に生起するという特徴もある。(18a)は一度のINTの適用によってX-Y-Z間でコピー形成をすることは不可能であることを示している。この問題について、(18b)が示すようにChomskyに従いX-Y-Z間のINTはフェイズ単位で遂行されると仮定しよう[注17]。

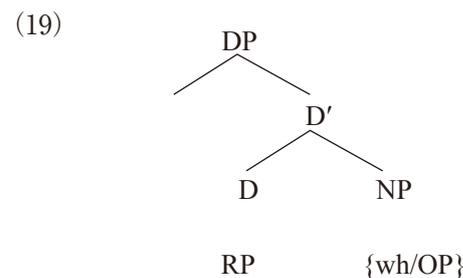
- (18) a. WS = $\{\alpha \dots X_i \dots \{\beta \dots Y_j \dots \{\gamma \dots Z_k \dots\}\}\} \rightarrow$
 $*INT_{(X&Y&Z)} \rightarrow$
 WS = $\{\alpha \dots X_i \dots \{\beta \dots Y_j \dots \{\gamma \dots Z_k \dots\}\}\}$
 b. WS1 = $\{\gamma \dots Y_j \dots Z_k \dots\} \rightarrow INT_{(Y&Z)} \rightarrow$
 WS1 = $\{\gamma \dots Y_j \dots Z_k \dots\} \rightarrow$ 関係詞YのIM \rightarrow
 WS2 = $\{\beta \dots Y_j \dots \{\gamma \dots Z_k \dots\}\} \rightarrow$ XのEM \rightarrow
 WS3 = $\{\alpha \dots X_i \dots \{\beta \dots Y_j \dots \{\gamma \dots Z_k \dots\}\}\} \rightarrow INT_{(X&Y)} \rightarrow$
 WS3 = $\{\alpha \dots X_i \dots \{\beta \dots Y_j \dots \{\gamma \dots Z_k \dots\}\}\}$

(18b)のプロセスはSafirが講じた三者間の間接的な同一指示を連想させる。ただし、Safirの分析と決定的に異なる点は、同一指示の担保をLF部門(のさらに外側)で規定する必要がなく、文法装置内に余計な負荷をかけずに済む点である。また、(18b)における当該要素間の同一性の認可についても、CI/SMインターフェイスはフェイズ単位で適宜統語論にアクセスできるというINTの定義からいずれも逸脱することなく遂行することが可能である。

次にもう一つの問題についてだが、それは関係詞の語彙・意味機能的な性質にある。関係詞と先行詞間の Φ 特性の共有についてはその派生的説明も含めて多くの先行研究で考慮されているものの、Heim and Kratzer (1998: 96)でも指摘されているように、そもそも関係詞そのものは独自の外延を持たず、痕跡位置と指示対象を同定する役割しか持ち合わせていないという事実についてはこれまであまり考慮さ

れてこなかったような印象を受ける。すると、独自の外延を持たないという意味解釈情報が極めて希薄な語彙項目をSOとして含む連鎖は十全な同一性に基づいたIMCとは、異なるコピー形成の可能性をもたらすことが示唆される。先行詞、関係詞、RPの三つのSOの中で関係詞だけが述部形成という意味解釈機能に特化したSOであることから、その同一性の付与については他のSOに依存する必要があると仮定しよう。また、(18b)で示したようにフェイズ単位でINTが適用されるという想定のもとでは、三つのSOの内関係詞だけが関係節の内側でRPと、そして外側で先行詞とINTの標的となる機会がある。内側で遂行されるINTについては、CP指定部に移動した関係詞とD主要部としてRPを内包するDP投射内の補部位置との間で形成される演算子変項構造を認可する役割が想定される。従来講じられてきた移動/IMを仮定しないRPの派生案では、RPを伴う関係節が開放文として認可されるメカニズムが不明であったが、このアプローチを採用すればそれが明らかになる。一方、節の外側で行われる先行詞・関係詞間のINTについては、両SOを同一指示化することにより、関係節内部で形成された変項位置に生起するRPが関係詞および先行詞と同一指示的であることが間接的に保証されることになり、その結果、関係節の述部から項へのタイプ変換(type-shifting)がINTによって駆動されることが予測される。以下、II節で見た事例を使って、具体的な派生のプロセスを見ていく。

RPの派生アプローチの基礎にはBoeckx (2003)で提案された残留分析を採用する[注18]。この分析のもとでは、RPはDP投射のD主要部として生成され、その補部NPには関係詞となるwh/OPが生起する。(19)では表記上の都合上伝統的な樹形図表記を一時的に採用している。



現行の理論枠組みとの整合を行う目的も兼ねて、(19)の構造に関して少し補足する。(19)では束縛子

(Binder) である関係詞 wh/OP と被束縛子 (Bindee) である RP が元々同一投射内で X-YP 関係を形成している。Boeckx によるとこの案は元々 Kayne (2002) に由来するとあるが、この形成については他の特別なデバイスを援用する必然性もないため外的併合 (EM) によってなされると考えるのが自然だが、近年のミニマリスト統語論研究の指針の一つである意味論の二重性の強い解釈 (strong version of Duality of Semantics) の元では、EM は θ 役割付与を伴うと考えられている。しかし、(19) における D-NP 間の EM ではそれが関与する余地がないように思われる。ただし、この逸脱については、例えば the と man を EM で併合して {the, man} という SO を形成する際に θ 付与が関与しないことは明白なのだから許容されるように思われる。また、この D-NP 間の EM が繫辞 (copular) を介した併合と性質を共有するものだと仮定すると、den Dikken (2006) が想定しているように、ここでは θ 役割の授受が関与しない。従って、DP 投射が形成された後に、埋め込み節述部によって θ 役割が付与される段階になってもこの DP は活性のままであることが予測される。すると、派生が進行し、C 主要部が派生に導入された後、C 主要部が C 統御領域内に存在する (20) 内の関係詞 NP wh/OP を極小探査 (Minimal Search: MS) で探査する際にも、関係詞が C 主要部にとって可視的なままであることが保証される。結果、関係詞 wh/OP は CP 指定部へと IM するが、この移動は wh/OP 関係詞単独で行われるため D 主要部は本位置へと残留する。これが RP の生成パターンの基本となる。以下、最も基本的な事例である (8) を以下 (20) として再掲し、その派生を示す。

(20) He has players *where* he just ignores them.

まず、D 主要部 RP them が関係詞 where と併合した DP 構造が形成される。なお脚注番号 7 で言及したように、Radford とは異なり、RP の where は C として基底生成されるのではなく、元々 RP の補部として生成されると仮定する。

(21) $\{_{DP} D \text{ them}, \{_{NP} \text{ where}\}_i\}$

NP where が DP の指定部に移動し、RP them は元位置に残留する。

(22) $\{_{DP} \{_{NP} \text{ where}\}_i, \{_{D} \text{ them}, \{_{NP} \text{ where}\}_i\}\}$

その後、標準的に派生が進行し、関係節 C 主要部が派生に導入される [注19]。ここで、C 主要部と

wh 関係詞間との間で RP の認可に必要な Φ 素性一致が遂行されると仮定する [注20]。その結果、where が C の指定部に IM する。網掛け部分は転送済み領域 (transferred domain) を表している。

(23) $\{_{CP} \{_{NP} \text{ where}\}_i, \{_{C'} C \{_{IP} \text{ he}_k \{_{I'} \text{ ignore-INFL} \{_{VP} \text{ he}_k \{_{V'} v \{_{VP} \{_{DP} \{_{NP} \text{ where}\}_i, \{_{D} \text{ them} \{_{NP} \text{ where}\}_i\}\}_j\}_j \{_{V'} \text{ ignore} \{_{DP} \{_{NP} \text{ where}\}_i, \{_{D} \text{ them}, \{_{NP} \text{ where}\}_i\}\}\}_j\}\}\}\}$

フェイズである CP 投射まで派生が到達した時点で INT が適用される [注21]。CI インターフェイスの判断により、関係詞 where と RP them が同一指示であることから IMC と認定され、二つの SO がコピーとみなされる。その結果、関係節 CP 内部には関係詞 where を演算子、RP が変項とした演算子変項構造が認可され、関係節 CP が開放文を形成する。その後、節外の先行詞 NP player および決定詞 the 関係節 CP は併合することになるが、Chomsky (1977) 以来多くの関係化の分析で採用されているように、関係節 CP と先行詞 NP の併合は対併合 (Pair-Merge) により遂行される。

(24) $\langle \{_{NP} \text{ players}\}, \{_{CP} \{_{NP} \text{ where}\}_i, \{_{C'} C \{_{IP} \text{ he}_k \{_{I'} \text{ ignore-INFL} \{_{VP} \text{ he}_k \{_{V'} v \{_{VP} \{_{DP} \{_{NP} \text{ where}\}_i, \{_{D} \text{ them} \{_{NP} \text{ where}\}_i\}\}_j\}_j \{_{V'} \text{ ignore} \{_{DP} \{_{NP} \text{ where}\}_i, \{_{D} \text{ them}, \{_{NP} \text{ where}\}_i\}\}\}_j\}\}\}\rangle$

Chomsky (2004) 以降、対併合で併合された要素は作業空間上で通常の集合併合 (Set-Merge) の SO とは異なる平面 (separate plane) に位置すると考えられているが、フェイズの構築後の転送の際に単純化 (SIMPL) を受けることによって同じ平面にシフトするため、その際に INT が適用され players と CP フェイズの端にある関係詞 where がコピーと認定される [注22]。その結果、先行詞・RP 間の同一性についても間接的に保証されることになり、適切な関係節解釈が得られることになる。そして、先行詞・関係詞・RP は SM 特性が一致しない非十全な同一性に基づいた IMC を形成するため、(16b) に従い、下部のコピーについても削除されず、SM 部門で顕在的に書き出されることが予測される。

また、本稿では Boeckx の関係詞移動 + RP 残留というアプローチを踏襲しているため、以下 (25a, b) に再掲する鳥の効果により容認可能性の低下が報告されている事例についても、Boeckx と同様の説明でその容認可能性を説明することができる。つまり、

関係節C主要部を起点としたMSにとって島の内部にあるRPは不可視的であるため、一致ができず関係化の指令を送ることができない。なお、両インターフェイスからの同一性の判断に基づきコピー形成とSM出力を決定するという本稿のアプローチからすると、関係詞とRPのコピー形成のためのINTの適用は関係節CPフェイズの構築が完了した時点で実行されるため、関係詞とRPのIMCが認定できずコピー形成ができないことが予測される。

(25) a. ? *Siud am boireanach nach eil fhios*

that the woman not be knowledge
agam ciamar a phòsadh duine sam bith i.
at-me how C marry-COND anyone her
'That's the woman who I don't know how
anyone could marry her.'

(Boeckx (2003: 110), 下線は筆者による)

b. * *Pira mia efimerida pu o Petros apokimithike*

got.I a paper C the Petros fell-asleep
eno tin diavoaze.
while it read.he

'I got a paper that Petros fell asleep while
reading (it)'

(Boeckx (2003: 111), 下線は筆者による)

なお、(16)に基づくこのアプローチは、形容語句(epithet)の生起についてもRPと同様の説明を与える可能性をもたらす。以下(26)はヘブライ語(Hebrew)の例である。下線部の *ha-šidiot* 'the idiot' が形容語句に相当する。

(26) *Ze ha baxur še yidašti et Dalit še*

this-is the guy that I-informed ACC Dalit that
ha more yaxšil šoto/šet ha-šidiot
the teacher will-flunk him/ACC the idiot

'This is the guy that I told Dalit that the teacher
will flunk'

(Boeckx (2003: 24))

この例では不変化補文標識 *še* が使用されているが、音形を持たない関係詞が形容語句と元位置でDP構造を形成すると仮定することにより、先の事例と同様の説明が与えられるため、(3c)で示した語彙・代名詞的な同一指示性についてもこのアプローチの元に包摂される可能性が得られる。

ここまでBoeckx例、すなわち島の効果が観察されるRP例を中心に上げてきたが、最後に(14)

内の(b)埋入型の例について考える。本稿で取り上げた埋入型の事例は全てRadford (2019) から採取した英語の例である。繰り返しになるが、Boeckx例とは異なり、埋入型のRPは島の内部に生起するため島の効果の影響を受けないという特徴がある。また、前節でも言及した通り、種類関係節や非制限的關係節を中心に観察されることから、Boeckx例とは異なる説明が予測される。de Vries (2006) などで提案されている非制限的關係節(27a)は、以下(27b)で図示される通り、関係節が独立した文として先行詞に等位接続し、制限的關係節において変項として機能する空所の位置には先行詞と同一指示的な空の束縛代名詞 *e* が生起すると考えられている。

(27) a. Mary loves the guy, who I met in Tokyo
yesterday.

b. [_{&P} [_{DP1} the guy]_i [_& [_{DP2} [_D e]_i [_{CP} [_D e]_i [_C
who I met [_{DP} e]_i]]]]]]

関係節構文でありながらも統語構造としては等位構造に近いというこの性質はChomsky (2020) において提示された等位接続構造の分析を連想させる。Chomskyは(28a)のような等位接続表現では等位項に相当するSOが作業空間に入る際、(28b)のような形でシーケンス形成(Form Sequence)を行うと提案している。

(28) a. John arrived and met Bill.

b. C, {John₃, INFL, <(&), {v, arrive, John₁}},
{John₂ {v*, {meet, Bill}} > } }

(John₁ = John₂ = John₃)

(Chomsky (2020: (10-11)), Johnの同一性については筆者による加筆)

シーケンスの内部においてそれぞれの等位項SOは互いから独立しながら派生される。派生が進行した後、John₃と表記した主語位置(IP指定部)にJohn₁かJohn₂がIMすることにより、(28a)を生成するインターフェイス出力が完成する。なお、INTを起点としたコピー形成のシステムにより、John₁とJohn₂のいずれのコピーがIMの標的となったとしても、移動先であるJohn₃からはいずれもC統御できる位置にあるためJohn₁、John₂、John₃をコピー形成の標的にすることが可能となる。なお、John₁とJohn₂の一方が削除されず残ってしまう場合、それはRoss (1967) の等位構造制約(Coordinate Structure Constraint)に違反する構造となるが、これを排除するために

Chomskyはシーケンス間の厳密同一性 (Strict Matching Condition) を一種のフィルターとして仮定している。

以上を踏まえた上で、以下では嵌入型RPを内包する関係節の派生に対し、潜在的な等位接続関係を持つ非制限的關係節の構造を仮定することにより、嵌入型RPの生起を説明する案を示す。嵌入的なRPの例である(12b)を以下(29)として再掲する。繰り返しになるが、嵌入的なRPを持つ関係節は島の効果に干渉されないという特徴がある。Radfordが提示した(29)には先行詞と関係詞の間にカンマが存在せず、一見それを非制限的關係節と見なす根拠に欠くが、そもそも島の効果を示さないという事実が(29)が非制限的な性質を持つことを示す根拠の一つと考えられるだろう。

(29) King Kong is a movie which you'll laugh yourself sick if you see it. (Radford (2019: 54))

また、河野(2012)にあるように、非制限的關係節と制限的關係節を区分する構文的特徴として、前者が主節命題とは独立した命題として機能する点を挙げている。この機能が(29)に当てはまるかを検証する方法についてはいくつか考えられる。一つは、以下のように二つの節を等位接続詞で接続することが可能かどうかを見ることだが、当然これは可能である[注23]。

(30) King Kong is a movie and you'll laugh yourself sick if you see it.

もう一つの方法については河野(2012)で指摘されている。関係節が先行詞を制限的に修飾するのではなく独立した命題内容を表す場合、先行する命題と逆接的な内容を表すhoweverが生起できるという特徴である。これに関しても、種類關係節のニュアンスを維持しつつも(29)に対して逆接関係を補うような若干の修正を施してしまえば、(31)のようにhoweverを置くことが可能となるため、当該關係節を非制限的なものと見なす判断材料となる[注24]。

(31) King Kong is a fine work at which you'll however laugh yourself sick if you see it.

以上から、この種の事例については主節と關係節が独立した命題内容を表し、従って等位接続関係で捉えるというアプローチが支持される。そこでChomsky(2020)の指針に従い、この等位接続関係をシーケンス形成で捉える。すると(29)について以下(32)で示すようなCP構造の二つのシーケンス(SQ)が

形成されることが予測される[注25]。

(32) SQ1: <C, King Kong, is, v, a movie_i>

SQ2: <which_i, C, you'll, v, laugh, yourself, if, you, INFL, v, see, it_i>

SQ2はその内部にRPを内包するif節からなる付加部を伴うという事実があるものの、いずれのSQの内部にも同一指示性を共有するSOの空所が存在しないという点においてSQ1とSQ2は厳密同一の状態にあると仮定する。そして、この厳密同一の状態を保持する要素こそがSQ2内のRP itである。というのも、itが生起する位置は標準的な制限的關係節で考えれば関係詞のIMの結果生じる空所である。つまり、シーケンス間の平行性が空所の有無によって定義される限り、SQ2のRP位置が空所だとすると、SQ1とSQ2間の厳密同一性が維持されなくなってしまう。つまり、SQ2における嵌入型のRPの生起は主節と關係節のシーケンス関係間に観察される厳密同一性を補うための最終手段(last resort)である可能性が導かれるのである。もし、この可能性が支持されるのであれば、シーケンス形成の射程が拡張されることとなり、文法機能内において同操作が普遍的なものであることを立証する証左となる。また、(28)のような事例に依存していた厳密同一性というフィルターの規定的な性質についても、その蓋然性が補われることになる。ただし、嵌入型のRPの有無はその文の容認可能性に大きな影響を与えないという事実があるため、義務的なコピー削除を伴う(28)の場合との比較を行うことにより、その相違の出自について引き続き検証する必要がある。

IV. 結 語

本稿では近年の言語機能に関する基礎仮説の一つであるINTを起点としたコピー形成のメカニズムの拡張可能性とその帰結について考察した。INTが参照するインターフェイスの同一性に十全な同一性という基準を仮定し、その充足度からコピー削除のパターンに変異を設けるという提案を行い、それによって再録代名詞RPを含む關係節構文の先行詞・關係詞・RPの書き出しに対する新たなアプローチを提示した。これにより、語彙的な情報が希薄であり純粋な意味機能的な役割が期待される關係詞と先行詞・RP間の同一性の担保について、關係詞を介したIMC形成が連続循環的に遂行されることが可

能となった。また、嵌入型RPの生起が観察される英語の関係節の非制限的な特性を指摘した上で、この種の例におけるRPの生起がシーケンス形成を認可する厳密同一性を担保するために遂行されるという新しい可能性を提示した。シーケンス形成に関する研究はまだ十分ではなく、文法機能内における遍在的性質の立証が課題だと思われる。本稿の提案はその立証への寄与が期待される。

【注】

[注1] 原典はKroch (1981: 127)。

[注2] 採取元はGordon Farquar, BBC Radio 5としている。

[注3] 以下、Chao and Sells (1983) が提示した解釈上のミニマムペアを示す例である。

- (i) I'd like to meet the linguist that Mary couldn't remember if she had seen ___/him before.
- (ii) I'd like to meet every linguist that Mary couldn't remember if she had seen ___ before.
- (iii)* I'd like to meet every linguist that Mary couldn't remember if she had seen him before.

(Chao and Sells (1983: 49))

先行詞であるevery linguistは束縛変更としての解釈を要求するが、RPが用いられている(iii)についてはそれが許されない。

[注4] Ⅲ節で本稿の提案について論じるが、Boeckxの残留分析を骨子としている。

[注5] この立場はBoeckxに限ったわけではない。詳細についてはRadford (2019: 55) と該当ページに掲載の先行研究を参照されたい。

[注6] 林 (2020) は先行詞・関係詞 (関係代名詞) / RP間の同一性をChomsky (2019) の枠組みから捉えることを試みた先行研究である。林は「interfaceはworkspaceにある任意の(二つの異なる)SOに自由にidentity解釈を与えて良い (ibid: 2)」と提案した上で、その条件として先行詞と関係詞の二つのSOが持つsyntactic/semantic featureが矛盾しない場合に限り、同じidentityが与えられるとしている。以下、(i)ではthe manとwhichがそれぞれ [+PERSON], [+THING] を持ち素性仕様が矛盾するからidentityが与えられず排除されるとしている。

- (i) *the man [which likes Mary] (ibid: 2)

本稿の表記法と整合させると、syntactic/semantic featureはΦ素性を指し、identityは同一性を指すと考えて支障がないと思われる。しかし、素性の一致に基づいて関係詞と先行詞の同一性を担保するという手法は、数としては十分ではないもののwhere, whereby, whatが関係詞として使用されてい

る場合に関して疑問が残る。林は過剰生成の可能性を懸念し、素性の共有を条件として仮定しているが、かえってそれが本文(8-9)の許容を妨げてしまっている。ただし、林は議論の対象を制限的関係節に限定しており、また(8-9)の事例を制限的関係節ではなく非制限的関係節として扱うべき可能性もあることから、関係詞の多様性が林の議論の妥当性を必ずしも低下させるとは限らないとここに明確に断っておく。なお、後述の本稿での提案は、SMインターフェイスにとってそれぞれ異なる出力を持つ先行詞と関係詞とRPだが、CIインターフェイスにとっては同一の出力であり、その不一致がIM配列を形成しながらも最上位のコピー以外についても削除を受けない原因となるという趣旨であるが、その要となるのは素性の同一性ではなく、派生の循環性と関係詞の意味機能である。詳細についてはⅢ節を参照されたい。

[注7] Radford (2019: 84) を参照。ただし、本稿の提案について論じているⅢ節では、関係詞whereは他の関係詞と同様にCP指定部へIMすると仮定している。というのも、(10)の不適格性に基づくwhere = C説は、他の関係詞についても現代英語ではthatとの共起が一般的に許容されない点から説得力を欠くように思われる。

- (i) *He has players *who that* he just ignores them.

[注8] 本文内次段落で、英語はBoeckx (2003) で定義される範疇としてのRPを持たない旨を言及しているが、一致がRPの認可に関わるという考えはイディオムの一部を先行詞とした関係節の内部にはRPを取れないこと(再構築効果(reconstruction effect)の欠如)を示した以下の英語例(i)によってさらに支持される可能性がある。

- (i) There are the kinds of strings that you have to pull ^{OK}∅ / *them to get into Oxford.

Takahashi (2018) がthere構文の関係化に観察される構文特性と対照させながらイディオム断片のDPに与えられる格が通常の構造格とは異なる格である可能性について講じている。もしthemに付与される格が内在格(inherent Case)のようなΦ素性十全(Φ-complete)の特性を示すものだとすると、関係節Cにとって一致の対象から外れてしまうため派生されないという説明が成り立つ可能性もある。

[注9] 原典はBever et al. (1976)。

[注10] 原典はRoss (1967)。

[注11] (12b)が非制限的関係節である可能性についてはⅢ節でも検証している。

[注12] 原典はMcCloskey (1990)。

[注13] ただし、この説明を採用したとしても、(12a)は

how疑問詞から始まるwh島の中に弱い島の中に生起するという事実が未説明のままである。単純に考えれば、弱い島であるため干渉効果が作用しないという立場を取るか、あるいはやはりこの事例についても嵌入的な代名詞構文の事例と捉えるかのいずれかだが、現時点ではそれを検証する手段を持ち合わせていないためこれ以上は扱わないこととする。

[注14] (II)を裏付ける例としてSafirは以下(i)の例を提示している。

(i) *? Michael Jackson, [a picture of whom]_i Mary wondered who would buy it_i arrives tomorrow.
RPの束縛子 (binder) である whom は随伴された NP に内包されてしまっており、随伴 NP 全体で見ると先行詞 Michael Jackson と合致しない。そのため、RP の認可条件として (I) だけでは不十分であり (II) を追加して仮定する必要性が生じると述べている。

[注15] 厳密に言うと、LF 部門ではなく LF' 部門でこの操作は遂行されると仮定しており、その結果 LF で適用される他の解釈規則と矛盾することなく同一性が担保されるとしている。

[注16] 実際に、先行詞・関係詞・RP がそれぞれの位置に EM で基底生成されるという案は Radford (2019) が丁寧な議論の末に導出した結論でもある。ただし、上記の SO 間の同一性の問題や Boeckx 型に見られた一致の認可条件などについては Radford では考慮されていない。そもそも関係詞を基底生成するという手法は Chomsky (1977) 以来広く支持されてきた関係節は述部として機能し、その述部としての認可は演算子移動による開放文 (open sentence) の形成によって遂行されるという指針に合致しない。

[注17] 繰り返しになるが、ここでも指示指標はあくまでも便宜上の理由で使用しているにすぎない。また、ここでの説明上に本質的に無関係な要素は省略している。

[注18] 一口に移動分析といっても、膨大な先行研究の中で LF 演算子移動分析 (Cf. Demirdache (1991) や 痕跡/コピーの変換分析 (Cf. Pesetsky (1998)) など様々な方策が講じられてきた。しかし、これらはいずれも拡張条件 (Extension Condition) や 包含性条件 (Inclusiveness Condition) など重大な派生の制約に抵触するものであり、文法機構を複雑にするという対価を考えるとこれらの可能性を取るには慎重を期すべきである。

[注19] 派生の記述内で用いているプライム記号 (′), s 下付き表記の指示指標 (_{i, j, k}) は便宜上の目的に過ぎない。また、以降議論と無関係な演算操作と

その描写については割愛する。

[注20] Boeckx の元々の提案では、一致 (Agree) の前に、C-NP 間の [WH] 素性の照合 (Match) が行われる。[WH] は関係詞が摘出に対して活性であることを明示する意味合いで想定されている。また、C-D, C-WH 間の多重一致が想定されている。

[注21] 当然の疑問として、CP に先立ち、vP フェイズや (広く議論されているようにそう見なすのであれば) DP フェイズの時点で INT が行われる可能性がある。CP で適用されるとしているのは、C 主要部は関係化の機能がエンコード化された談話的な素性を持ち、これが関係化を駆動するのであれば、関係詞によって駆動される変項の指示対象の同定機能もこの時点まで繰延になることが妥当であると考えられる。

[注22] この INT のタイミングについては林 (2020) にも同様の想定が観察される。

[注23] (30) および (31) の容認度の判断は Josh Bowers 氏による。

[注24] Radford (2019) の例はいずれもラジオ、テレビ、インターネットのようなメディアから採取した口語英語の事例である。(31) の関係詞 which の前には原文にない at の前置詞随伴が見られるが、規範的な観点からすれば at を補う方が望ましいというのが Josh Bowers 氏の判断である。

[注25] 説明上不要な詳細については (32) から便宜上除外している。

【参考文献】

- Bever, T. G., Carrol, J. M. & Hartig, R. (1976). Analogy or ungrammatical sequence that are utterable and comprehensible are the origins of new grammars in language acquisition and linguistic evolution. In T. G. Bever, J. J. Katz, & D. T. Langendoen (Eds.), *An Integrated Theory of Linguistic Disability*, 149-182. New York: T. Y. Crowell Press.
- Boeckx, C. (2003). *Islands and Chains: Resumption as Stranding*, Amsterdam: John Benjamins.
- Borer, H. (1984). Restrictive relatives in Polish and English. *Natural Language and Linguistic Theory*, 2, 219-260.
- Chao, W. & Sells, P. (1983). On the interpretation of resumptive pronouns. *Proceedings of the North East Linguistic Society*, 13, 47-61.
- Chomsky, N. (1977). On *wh*-movement. In P. Culicover, T. Wasow, and A. Akmajian (Eds.), *Formal Syntax*, 71-132. New York: Academic Press.
- Chomsky, N. (1995). *The Minimalist Program*, Cambridge MA: MIT Press.

- Chomsky, N. (2004). Beyond explanatory adequacy. In A. Belletti (Ed.), *Structures and Beyond*, 104-131. Oxford: Oxford University Press.
- Chomsky, N. (2019). Some puzzling foundational issues: The Reading problem. *Catalan Journal of Linguistics Special Issue*, 263-285.
- Chomsky, N. (2020). Minimalism: where we are now, and where we are going. Plenary talk at the 161st conference of Linguistic Society of Japan, November 22nd.
- den Dikken, M. (2006). *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, Copulas*, Cambridge MA: MIT Press.
- Erteshik-Shir, N. (1973). *On the nature of island constraints*. Unpublished doctoral dissertation, MIT.
- Erteshik-Shir, N. (1992). Resumptive pronouns in islands. In H. Goodluck, & M. Rochemont (Eds.), *Island Constraints: Theory, Acquisition and Processing*, 89-108. Dordrecht: Kluwer.
- Evans, G. (1980). Pronouns. *Linguistic Inquiry*, 11(2), 337-362.
- 林慎将. (2020). 反Self-MERGEとしての反局所性. 日本英語学会第38回大会ワークショップ, 統語領域におけるcopyをめぐる諸問題—copy派生メカニズムの単純化. 2020年11月8日, オンライン開催.
- Heim, I. and A. Kratzer. (1998). *Semantics in Generative Grammar*, Cambridge MA: Blackwell.
- Hornstein, N. (2001). *Move! A Minimalist Theory of Construal*, Cambridge MA: Blackwell.
- 河野継代. (2012). 『英語の関係節』. 東京: 開拓社.
- Kayne, R. S. (2002). Pronouns and their antecedents. In S. D. Epstein and T. D. Seely (Eds.), *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, 133-166. Oxford: Blackwell.
- Kroch, A. (1981). On the role of resumptive pronouns in amnestying island constraint violations. *Chicago Linguistic Society Papers*, 17, 125-135.
- McClosky, J. (1990). Resumptive pronouns, A-bar binding, and levels of representation in Irish. In R. Hendrick (Ed.), *Syntax and Semantics 23: The Syntax of the Modern Celtic Languages*, 199-256. San Diego: Academic Press.
- Pesetsky, D. (1998). Some optimality principles of sentence pronunciation. In P. Barbosa, D. Fox, P. Hagstrom, M. McGinnis, and D. Pesetsky (Eds.), *Is the Best Good Enough?: Optimality and Competition in Syntax*, 337-383, Cambridge MA: MITWPL and MIT Press.
- Pesetsky, D. & E. Torrego. (2001). T-to-C movement: causes and consequences. In M. Kenstowicz (Ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, 355-426. Cambridge, MA: MIT Press.
- Prince, E. (1990). Syntax and discourse: a look at resumptive pronouns. *Berkeley Linguistics Society Proceedings*, 16, 482-497.
- Prince, E. (1995). On *kind*-sentences, resumptive pronouns, and relative clauses. In G. Guy, J. Baugh, & D. Schiffrin (Eds.), *Towards a Social Science of Language: A Festschrift for William Labov*, 223-235. Cambridge: Cambridge University Press.
- Radford, A. (2019). *Relative Clauses: Structure and Variation in Everyday English*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Ross, J. R. (1967). *Constraints on variables in syntax*. Doctoral dissertation, MIT. (Published as Ross, J. R. (1986). *Infinite Syntax!*, Norwood NJ: Ablex Publishing Corp.)
- Safir, K. (1986). Relative clauses in a theory of binding and levels. *Linguistic Inquiry*, 17(4), 663-689.
- Takahashi, Y. (2018). A DP movement approach to relativization from VP idioms: toward a unified approach. *English Linguistics*, 34(2), 348-365.
- de Vries, M. (2006). The syntax of appositive relativization: on specifying coordination, false free relatives, and promotion. *Linguistic Inquiry*, 37(2), 229-270.